●―東欧・スラブ

曲がりくねった道

伊東孝之（いとう・たかゆき）
早稲田大学政治経済学術院・大学院政治学研究科

地域研究者の軌跡

①生年・出身地……一九四一年、三重県

②専門分野・地域……比較政治学・ポーランド

③学歴……東京大学教養学部国際関係論分科・東京大学大学院社会学研究科国際関係論専攻

④職歴……一九七二年一〇月北海道大学法学部助教授、七三年九月同付属スラブ研究施設助教授、七八年四月同スラブ研究センター教授、九三年四月早稲田大学政治経済学部教授

⑤現地滞在経験……ドイツ（二六～三〇歳、四年間、留学生）、ポーランド（二七歳、一ヶ月、留学生）、ポーランド（二九歳、三ヶ月、留学生）、ソ連（モスクワ、キエフ、トビリシ、エレバン、バクー、ヴィルニュス、リガ、タリン、三六～三七歳、一〇ヶ月、交換研究員）、ドイツ（四一～四二歳、一年間、客員講師）、スイス（六〇歳、六ヶ月、客員講師）、ポーランド（六〇歳、六ヶ月、交換研究員）、ロシア（モスクワ、六一歳、六ヶ月、交換研究員）、その他東欧各国に十数回科研費などで現地調査

⑥研究手法……フィールド経験は重要。インタビュー、参与観察など。対象国が社会主義国であったため、必ずしも自由取材は許されなかった。ただし、開発途上国とは違って、社会科学の研究水準が非常に高い国であったので、現地の研究者と交流したり、日本では必ずしも入手できない研究文献を渉猟したりすることが重要だった。また、長期に住み込み、とくに目的もなく学生、隣人とつきあったり、新聞、テレビを見たり、地方に旅行したりすることがきわめて貴重であった。

⑦所属学会……日本政治学会、日本国際政治学会、日本比

較政治学会、日本ロシア・東欧学会、日本平和学会

⑧研究上の画期……ポーランド「連帯」運動

⑨推薦図書……Gerardo L. Munck & Richard Snyder, *Passion, Craft, and Method in Comparative Politics* (Baltimore: Johns Hopkins UP, 2007).

メッセージ

もともとの専門は国際関係論だった。高校時代は外交官になるつもりだった。大学に入ってまもなく外交官はつまらないと思うようになったが、さればといって何になってよいか分からない。それを考えるために四年生のときに留年することにしたが、それでも決まらなかったために大学院に入った。典型的なモラトリアム進学だった。

理論を選ばなければというよりも、地域を選ばなければという意識が先に立ったのは、当時国際関係論は地域研究であるという理解が主流であったことによるものだろう。私のすぐあとに入ってきた学年あたりから理論志向の学生が増えてきたし、そういう学生は米国に留学すると立派な理論屋になって戻ってきた。

地域については、スペイン、中国、ドイツ、ロシアと迷って、最後に東欧に落ち着いた。「落ち着いた」といっても、さしあたりは抱負として落ち着いたのであって、研究者としてはずっと先であった。地域研究者となるためにはまず語学を身につけなければならない。これが難題だった。使い物になるまでに数年はかかる。資料もなかった。

自分の心は分裂していた。一方では外交史に関心があった。東欧への関心は大国の外交政策の対象として芽生えたものであるような気がする。他方では、社会思想において普遍主義の主張と特殊性への配慮がどのように接合されるかという関心があった。この関連でマルクス主義者の民族問題論を研究しようと思い、ドイツ語、ポーランド語、ロシア語の関連文献を読みあさった。

語学的にはドイツ研究者、ロシア研究者になることもできたが、その分野ではすでに大勢の先輩や同輩がいて、競争が激しそうだった。競争の少ない国をやりたいという功利主義的な動機が働いたのかも知れない。留学先にドイツを選んだことも大きく影響していた。ドイツでは、アメリカのように研究のクエスチョン、デザイン、メソッドについて細かい指導がほとんどなく、事実上自由放任だった。ドイツからしばしばポーランドに調査に出かけたが、そのうちにポーランドの歴史、社会、政治の魅力に取り憑かれてしまった。しばらくのちにポーランドに『連帯』運動、民主化という大きな政治変動が起きて、自分の選択を決定的なものとした。

現在の勤務先に移ってからは専ら比較政治学を講義し、主として民主化問題を取りあげている。自分の関心は東欧にあるが、それを学生に押しつけないように心がけている。